

第一部 対話のテキスト言語学的分析

第1章 *Die Bäume* (『木々』)のテキスト言語学的構造分析 —テキストの多層性について—

0. はじめに

カフカの小品 *Die Bäume* (『木々』) は、これまでさまざまな観点から分析され、いろいろな解釈が提出されてきた。解釈の際に問題となるのは、„Baumstämme im Schnee“ (「雪のなかの木の幹」) という表現の読みである。その読みには、それを叙述する動詞 „aufliegen“ (「載っている」) の語義理解が関わってくる。本章では、まず、この動詞の語義をめぐってなされてきた解釈上の諸問題を、テキスト言語学的な作品構成上のダイナミズムと文献学的調査の二つの観点から検討し直す。つぎに、この作品に関する従来の研究の問題点として、研究の重点が意味論 (事態提示) レベルに置かれて過ぎていたことを指摘し、それが埋め込まれているテキスト内言語相互行為レベルにおける分析の必要性を示唆する。このようなテキストの多層性を考慮したテキスト分析に基づいて、„Baumstämme im Schnee“ の解釈をめぐって従来提出されてきたさまざまな見解を検証する。最後に、カフカの文体的特徴 (技法) に関するテーゼを提出する。

1. 問題の所在

カフカの作品の多くは、解釈が必ずしも一義的に特定できず、理解が困難だという指摘が一般になされている。本章で取り上げる *Die Bäume* もそのような作品の一つである。この作品についてはさまざまな解釈が提出されてきている。¹⁾ その複数の解釈が翻訳にも反映されることがある。たとえば、つぎのように、異なる解釈に基づく翻訳がある。

翻訳例 (1)

だつて私たちは雪中に立つ樹の幹なのだ。見たところそれはすべすべと

雪の上に載っている。ちよつと押せば簡単に押しのけられそうに見える。ところが、そうは行かない。固く大地に根を張っているのだから。だが見よ、それさえも見かけに過ぎないのだ。

(マックス・ブロート編『カフカ全集』第3巻(高安國世訳)、新潮社、1953、35頁。なお、原文は旧字体。下線は引用者による。以下同様)

翻訳例(2)

人間は雪の中の「切り倒された」樹木に似ている。見かけは平らかに横たわっていて、ちよつと押せば押しのけられそう。いや、それはだめだ、木は地面としっかり結びついている。しかしごらん、それさえただ見かけにすぎない。

(城山良彦「ドイツにおけるカフカ研究の現在」、『ユリイカ詩と批評』第2巻、青土社、1979、79頁)

この二種類の翻訳例からも見て取れるように、作品で描かれる「樹の幹」あるいは「樹木」の状態は、例(1)では立木として、例(2)では切り倒された木として捉えられている。すなわち、同一の対象が、異なる姿として理解されていることがわかる。²⁾ このように異なる読みが生じてしまう理由について、作品に含まれるある動詞に根拠をもとめる議論がある。たとえば三原弟平は「こうしたはっきりしないおかしいところは、カフカの書くものの中にじつは頻繁にあらわれてきているんです」と述べた後、「スライドするパラドクス」の例として『木々』を引き合いに出して次のように説明している。

たとえば一九一三年に出版された『観察』の中に「木々」(Die Bäume)という小品があります。「なぜならぼくらは雪の中の木の幹(Baumstämme)のようなものに似ている。それは一見すると滑らかに雪のうえにのっている(aufliegen)ようだ。ちよつと一突きすればずらしてのけることができそう。ところがそうはいかない。木の幹はかたく大地とむすびついているのだから。しかし見たまえ、そのことですら、そうみえるというにすぎないのだ」。これを一読すると、雪のなかに根元

は埋まって幹だけがスッと立っているような木を連想してしまいますよね。ところが、この幹が雪のうえにのっているという言葉に *aufliegen* という言葉が使われている。これじゃあ、幹が雪の上に立ってのっているとはとれない。この幹は横になって雪の上ののっていることになる。つまり、材木のかたちで地面に横におかれていたところに雪がふりつもったということになる。しかし、これには、材木という題ではなく、「木々」という題がついている。それに「かたく大地とむすびついている」という言い方にはどうしても根をおろして大地に立っている木を想像してしまう。しかし、そうしたステレオタイプな受けとり方を *aufliegen* というただ一つの言葉が不可能にしてしまう。結局僕らにはこの幹がどういうぐあいに雪の上にあるのかわからなくなってしまふ。

(池田ほか 1982: 212-213)

ここで注目したいのは、日本語の「滑らかに」と「のっている」という表現どうしが意味論的に共起可能かどうかといった日本語訳に関する問題ではない。³⁾ そうではなく、『木々』という作品に現われる „*aufliegen*“ という動詞一つのために、この作品の「木の幹」の想定が困難あるいは不可能になると主張されている点を問題にしたいのである。この動詞の辞書的意味を根拠にした主張には十分な説得力があるのだろうか？そもそもこのひとつの動詞にこだわる必要があるのだろうか？以下では、このような点を中心にこの作品を分析する。

2. *Die Bäume* のテキスト言語学的分析

2.1. テキストの構造

テキスト言語学的分析にはさまざまなレベルや手段がある。本章では、テキストが提示する意味世界に関わる意味論レベルと、それが埋め込まれているテキスト内の言語相互行為レベルに関してのみ分析したい。⁴⁾ それによって、意味論レベルでの対立構造と、テキスト内言語相互行為によって構成されるダイナミズムが明示できるはずである。

以下に作品 *Die Bäume* のドイツ語原文を引用する。⁵⁾ なお、原文には、

今後の議論の都合上、各文に便宜的に番号をつけておく。

Die Bäume

(1)Denn wir sind wie Baumstämme im Schnee. (2)Scheinbar liegen sie glatt auf, (3)und mit kleinem Anstoß sollte man sie wegschieben können. (4)Nein, das kann man nicht, (5)denn sie sind fest mit dem Boden verbunden. (6)Aber sieh, sogar das ist nur scheinbar.

(DL, S.33)

文(1)は、「Denn」という理由を導く接続詞で始められ、人称代名詞の「wir」が「Baumstämme im Schnee」と対比される。通常、「Denn」という接続詞に導かれる文は、先行する言明に対して理由を述べる。しかし、奇妙なことに、ここではその言明に相当する文が先行していない。もちろん、タイトルを先行文と捉えることも可能ではある。たとえば、そのような説明として次のような議論がある。

短いこの小品を一読するとき、「だって」(denn)という理由をあらわす接続詞に冒頭を導入されているので(ママ)、いったいこの文章のまえにどういう思考が先行していたのかと思うのだが、そのまえには表題の Die Bäume しかないから、「樹々」とこの小品を題したのは、なぜならばくらが雪のなかの木の幹のようなものに似ているからだ、というふうに一応読みとくことができる。(三原 1988 : 98)

文(2)では、代名詞「sie」が「Baumstämme im Schnee」を指示し、それに関する言明がなされる。その際、「scheinbar」という表現により、その言明が知覚判断に基づく「主観世界」として提示されていることがわかる。ドイツ語の「scheinbar」には、文副詞(Satzadverb)と述語形容詞(prädikatives Adjektiv)の二種が区別され、両者は言語表層上のふるまいが異なる。たとえば、前者には強勢が置かれませんが、後者には強勢が置かれる。したがって、その論理的意味も違ってくる。前者は、挿入句(Parenthese)と考

えることもでき、知覚判断に基づく「主観世界」を表現するが、後者は、事実判断を可能にする「客観世界」と関わると言える。

文(3)では、*„mit kleinem Anstoß“* という表現によって提示される条件および接続法第二式の *„sollte“* により、文(2)の「主観世界」という条件内で生起する可能性が表現される。したがって、文(2)が根拠となって、文(3)が予想される帰結となる。

文(4)では、*„das“* が先行する句 *„sie wegschieben“* を受け、文(3)の内容が否定される。文(4)の表現形式に注目すると、特定の発話行為と結びつく場面性の高い表現が使われていることに気づく。場面性の高い表現とは、ある発話行為と慣習的に結びつき、それが発せられると特定の場面をも予想させてしまうような定型表現 (Routineformel) のことである。*„Das kann man nicht.“* という表現は、口語的であり、対話相手とその人物に対する、ある種の訴えかけの潜勢力を有している。⁶⁾ これをより記述的に言い換えれば、たとえば *„Das ist unmöglich.“* となろう (vgl. Coulmas 1981, 丸井 1988)。

文(5)では、接続詞 *„denn“* により、文(3)を否定した文(4)の理由が表明される。また、事実判断が可能な世界、すなわち「客観世界」への関連が提示される。

文(6)では、テキスト表層上のテーマとの関連で、文(5)の内容が否定される。述語形容詞としての *„scheinbar“* は、既述のように文(2)のそれとは異なり、実際には違うという否定が含意される。しかし、この否定を理由づける文は後続していない。また、文(6)の表現も、文(4)と同様に口語的であり、特定の場面との結びつきが強く、したがって場面性が高い。

2.2. 意味論レベル

以上の簡単な分析から、このテキストは、意味論 (事態提示) レベルでは *„wir“* と *„Baumstämme im Schnee“* の比較から始められ (文(1))、残りのテキストはすべて *„Baumstämme im Schnee“* をテキスト表層上のテーマとして展開される (文(2)～(6))。まず、「主観世界」へ関連づけられ、その様態が提示されるが、次の文ですぐにそれが否定される。そして、その根拠として事実判断を可能にする「客観世界」での様態が述べられるが、それも

後続文ですぐに否定される。この否定の繰り返しにより、„Baumstämme im Schnee“の様態に関する二つの言明が、事態レベルで対立したまま放置される。したがって、文(1)における対比は、説明されないまま残されることになる。

テキストの構成に関して、「環 (Zirkel)」が問題にされることがある。たとえば Kobs によれば、この作品では文(2)以降の論証が終了せず、最後の文(6)が文(2)にもどるという矛盾の環が描かれ、それは「パラドクスの環」(„der paradoxe Zirkel“)と特徴づけられるという (Kobs 1970: 7-19)。しかし、このテキストの構造として、「主観世界」が「客観世界」の立場から否定され、今度はその「客観世界」も否定されるという展開をとっている。単純に最後の文(6)が文(2)に回帰するような循環構造が問題になっているとも考えにくい。だからといって、最後の文が、最初の文(1)に回帰するとも考えられない。表層上のテーマが異なるからである。このような循環についてはテキスト冒頭部の接続詞 „denn“ との関連で議論されることがある。たとえば、つぎの植田(1985)の論を検討してみよう。

冒頭におかれた理由を表わす接続詞 denn [なぜなら] は、どの主張に対する理由を導くのか。それは、最後の文「しかし見よ、それさえも見かけにすぎない。」との主張の根拠付けを提示しているのである。こうして、このテキストは、それ自体が循環(ママ)構造を成している。その構造は、テキストの意味内容と一体になっている。そのテキストの意味内容は、この四行ほどの物語に二回でてくる「見かけ上 *scheinbar*」という語(一度は副詞、もう一度は形容詞としてであるが)によって明らかのように、存在の不確定さ、判断の不確定さ、決定不可能性を述べている。(植田 1985: 72)

接続詞 „denn“ について、「どの主張に対する理由を導くのか」という問いの立て方は、正しい。しかし、その答え、あるいはその導き方は、必ずしも正しいとは言えない。第一に、紙幅の都合からかもしれないが、根拠を示さぬまま、最後の文に関係していると断定しているからである。第二に、こ

のテキストは、**„wir“** を表層上のテーマの中心において循環しているわけではないからである。⁷⁾

2.3. 言語相互行為レベル

テキスト内の言語相互行為レベルに関しては、理由づけをする二つの接続詞 **„denn“**、否定を行なう **„Nein, das kann man nicht.“** と **„Aber sieh, sogar das ist nur scheinbar.“** といったように談話組織の構成に関わる機能の強い表現が使用されている。しかも、その程度が、度数詞 **„nur“** の使用により次第に高められてゆくので、このテキストには結束性 (Kohärenz) のある言語相互行為が想定可能である。その性格は、日常的な論弁性 (Argumentativität) と言えるものである。⁸⁾ しかし、整合的な帰結が提起されていないので、最終的に何を訴えかけようとしているのか確定できない。また、出発点も、突然 **„Denn“** で始められるので、先行する議論も「開かれて」(offen) いる。したがって、このテキストは、テキスト内言語相互行為レベルでは、前後が「開かれて」いる奇妙な論弁構造をもつと言える。

2.4. 構造記述

上述の分析結果を図示してみよう。なお、矢印は文が関係する方向を、 ∞ は比較を表わす記号である。

[Argument]

? ← (1) Denn wir の Baumstämme im Schnee

[理由]	(2) → (3) [言明][予想]	主観世界
	↑ ↓	
	(4) ← (5) denn [否定] [理由]	客観世界
	↑ ↓	
	(6) [否定]	(←) ? ([理由])
被説明項 (<i>explanandum</i>)	説明部 (<i>explanans</i>)	

—図 1—

3. テキスト理解のための基礎

3.1. 解釈の試み

3.1.1. 意味論レベルにおける対立

上述の分析結果に基づき、この作品を理解するための前提を述べてみよう。意味論レベルでは、与えられた表現にどのような事態とその関連が提示されるのかを考える。問題になるのは、表題の „Die Bäume“, „Baumstämme im Schnee“, 不定句形式で取り出すと „glatt aufliegen“, および同じく不定句形式で取り上げると „fest mit dem Boden verbunden sein“ という表現相互間の複雑な絡み合いである。表題の „Die Bäume“ は通常、立っている生木を思い浮かべさせる。ところが、本文中の „Baumstämme“ には、伐採された「丸太」と「(生木の) 幹の部分」という二つの意味が認められるので、理論的に二義的である。⁹⁾

ところで、従来問題とされてきた „aufliegen“ という動詞の意味だが、

Deutsches Universalwörterbuch (DUW)にはつぎのように説明されている。

auf etw. liegen : die Bretter liegen auf Querbalken auf; der Deckel liegt nicht richtig auf (DUW, S.183)

なお、参考のために、*„aufliegen“* を構成する基本動詞 *„liegen“* の説明も見ておこう。

eine waagerechte Lage einnehmen; in ruhender, [fast] waagerechter Lage, Stellung sein; [der Lange nach ausgestreckt] auf einer Unterlage ruhen; Weinflaschen sollen l., nicht stehen (...) (DUW, S.1019)

この辞書記述から、*„aufliegen“* という動詞によって描写される対象は、一般に、水平方向と関係づけられていることがわかる。すると、この動詞によって叙述される *„Baumstämme“* は横になっている「丸太」を容易に連想させる。ところが、後半部の *„fest mit dem Boden verbunden sein“* という動詞句によって叙述される対象は、根を張っていることを想像させるので、*„Baumstämme“* は *„Bäume“* か生木の一部として立っている状態にあると理解される。したがって、テキストでは、同一のテキストにおける表層上のテーマである *„Baumstämme im Schnee“* について、上述の対立する二つの述語表現が結びつけられているので、「丸太」と「立木」という二つの対象が想定可能である。¹⁰⁾

この想定に基づくなら、二つの対立する述語のために、*„Baumstämme im Schnee“* によって表わされる対象を一定した姿では捉えられないと主張することも不可能ではない。たしかにその点で、このテキストの理解が困難になっていると言えるかもしれない。しかし、同一テーマについて展開されているテキストにおいて、非同一の対象が描かれているとは、通常は考えにくいので、このような想定には整合性に関して無理があると言わざるをえない。

ところで、このテキストの *„Baumstämme im Schnee“* について述べている述語のほとんどは、抽象化して考えれば、存在を表わす動詞 *„sein“* で

言い換えることができる。¹¹⁾ たとえば、文(1)、文(2)、文(5)は、それぞれ、(1') **„Denn wir sind [= existieren] wie Baumstämme im Schnee“**, (2') **„Scheinbar sind [= existieren] sie glatt (auf etwas)“**, (5') **„denn sie sind [= existieren] fest mit dem Boden verbunden“** と書き換えることができよう。こう考えれば、少なくともこの3文は、**„Baumstämme im Schnee“** の「存在」の仕方、つまりどのような形で存在しているかという「在り方」について述べていると解釈できる。この議論に基づくと、このテキストでは、**„Baumstämme im Schnee“** が、「丸太」であろうが「立木」であろうが、とにかくその存在の仕方が、**„glatt“** と **„fest“** との対立として描かれているとみなすことができる(西嶋 1989: bes. 42f.)。とするなら、意味論レベルで注目すべきなのは、非同一対象ではなく、**„Baumstämme“** が **„Schnee“** の上に単にのっているだけなのか、あるいは **„Boden“** とかたく結びつけられているのか、という対立ということになろう。ここで、最初に現われる文副詞としての **„scheinbar“** による知覚世界の描写を考慮に入れば、この対立は、「主観世界」と「客観世界」との「見掛け上」の対立と解釈できる。

3.1.2. 言語相互行為レベルにおけるテキストのダイナミズム

テキスト内言語相互行為のレベルでは、始発点と終着点とが「開いて」はいるが、論弁性という点で整合性のあるテキスト構造が明らかにされた。この観点からすれば、その中で描写される **„Baumstämme“** が、二つの対立する述語のために同一対象を指示しない、というようには考えにくい。つまり、**„aufliegen“** と **„mit dem Boden verbunden sein“** という二つの異なる述語があるからといって、**„Baumstämme“** について、一方は横倒しの「丸太」で、他方は「立木」という対立が描写されていると想定することはむずかしい。したがって、このレベルを考慮に入れば、意味論レベルでの対象の「対立」は、すでふれたように、同一対象に関する単に「見掛け上」の対立として理解できる。

3.2. 文献学的調査

ところが、上述のような作品全体のダイナミズムには十分注目せず、動詞

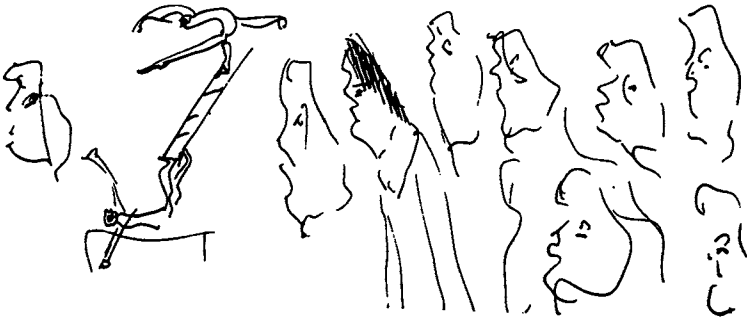
„aufliegen“ と動詞句 „mit dem Boden verbunden sein“ との対立にこだわり、カフカの「歪み」を抽出するという目的のために、その対立に何らかの特別の意味を見い出そうとする研究もある。もし文学解釈上、どうしても動詞 „aufliegen“ による水平方向の対象との共起関係に固執し、それによって引き起こされる対立を主張したいのなら、文献学的にカフカの他の作品での使用例を検討してみるべきであろう。その結果、明らかに、この動詞によって描かれる対象について水平の方向性が問題にされていると確認されて初めて、こだわる根拠づけができるのではないであろうか。

カフカ作品の中で他の用例を探した結果、カフカの日記につきのような用例が見つかった（下線は引用者による）。

Das können wohl einzelne z.B. japanische Gaukler, die auf einer Leiter klettern, die nicht auf dem Boden aufliegt, sondern auf den emporgehaltenen Sohlen eines halb Liegenden und die nicht an der Wand lehnt sondern nur in die Luft hinaufgeht. (TB, S. 14)

この例では、明らかに、„Leiter“ (「梯子」) が „Sohle“ (「足の裏」) の上に置かれていて、その方向は垂直、あるいは少なくとも立っていると解釈できる。つまり、梯子の下端の平面部が足の裏の平らな部分と接しているわけである。少なくとも、梯子が横倒しになっているとは考えにくいであろう。なぜなら、この梯子は、さらに „klettern“ という垂直の方向性に関わる動詞と結びついているからである。

なお、日記には、上記文章の次のページにカフカがその曲芸師の梯子芸を描いた挿し絵がある (TB, S. 15)。



上記の文章とこの挿絵は対応していると思われる。上記用例とそれに対応する絵は、「aufliegen」の理解に決定的な役割を演じると言えよう。

他にも用例はあるが、少なくとも上例では、動詞「aufliegen」が単に平面に対する接触に重点を置いた動詞として使用されていると言えよう。そして、1例でも反例があれば、今後の議論には十分である。¹²⁾ この例が示唆しているように、カフカ作品では「aufliegen」によって描かれる対象は、垂直方向の状態であっても差し支えないと言える。したがって、*Die Bäume* の中で「aufliegen」という動詞が使用されているからといって、「Baumstämme」を横倒しの状態と理解しなければならない必然的な理由はないことが明らかになった。

4. 「Baumstämme im Schnee」に関する4つの見解とその批判的検討

4.1. 4つの見解

主に文学研究の分野では、この *Die Bäume* で描かれる「Baumstämme im Schnee」の状態の理解に関して、とくに作品中で用いられている述語「aufliegen」と「mit dem Boden verbunden sein」との対立が強調されてきた。内外の文献で提出されている代表的な見解は、とくに動詞の「aufliegen」の意味の捉え方にしたがって四種に分類できる。すなわち、「Baumstämme im Schnee」の状態に関するテーゼは、「aufliegen」という動詞に着目し、そこに何らかの特別な意味を見い出そうとするかどうかで、まず二つに大別することができる。こだわるテーゼを「強いテーゼ」とし、こだわらないテー

ぜを「弱いテーゼ」と呼ぶことにしよう。両テーゼはさらに、それぞれ二つの下位テーゼに分けられる。強いテーゼは、対立を強調する下位テーゼと「横倒し」という一義化をもとめる下位テーゼとに分けられる。他方、弱いテーゼは、「立木」という一義化を求める下位テーゼと両義的とする下位テーゼとに分かれる。¹³⁾

(1) 強いテーゼ：動詞 *„aufliegen“* の水平方向に関連する使用を強調する

(1a) *„Baumstämme“* の矛盾的解釈

(1b) 丸太としての *„Baumstämme“*

(2) 弱いテーゼ：作品全体の解釈の際、*„aufliegen“* の水平方向の使用法を無視する

(2a) 立木の一部としての *„Baumstämme“*

(2b) 丸太あるいは立木の一部としての *„Baumstämme“*。両解釈に本質的な差異はない

4.1.1. *„Baumstämme“* の矛盾的解釈

第一は、動詞 *„aufliegen“* にこだわる強いテーゼのうち、*„mit dem Boden verbunden sein“* との対立を強調するテーゼである。この立場は、対立を強調することにより、このテキストが *„Baumstämme im Schnee“* について統一的な像、つまり、一義的で整合的な像を結ばせないと主張する。すなわち、通常、水平方向の対象と共起するとみなされる動詞 *„aufliegen“* を意図的に使用することによって、作者は、*„Baumstämme“* の像を歪ませていると主張する。これは、その提唱者によれば、「スライドするパラドクス」(*gleitendes Paradox*) の例とされる。¹⁴⁾

しかし、この理解は、動詞 *„aufliegen“* によって描かれる対象が常に水平方向に関連しているという前提に基づくものなので、上述の文献学的分析から、十分な説得力をもたないと言えよう。なぜなら、動詞 *„aufliegen“* が、他のカフカ作品において必ずしも水平方向とは関係なく用いられている例が明らかにされたからである。したがって、少なくとも、対象の非同一性を問

題にする必然性はないと言えよう。

4.1.2. 丸太としての „Baumstämme“

第二に、強いテーゼのうちでも一義化をもとめるものであるが、これは „Baumstämme“ を伐採され横倒しになっている「丸太」と理解する。この理解では、„Baumstämme im Schnee“ と動詞句 „glatt aufliegen“ との間には、そもそも対立は生じない。さらに、„fest mit dem Boden verbunden sein“ についても、たとえば雪によって凍りついてしまった状態にあると解釈すれば、対立は容易に解消される。このような見方は、一般のドイツ語話者の理解に沿うものといってい¹⁵⁾ この見解は、„Baumstämme“ と „aufliegen“ との共起関係によって「通常」予想される様態から止むをえず生じた解釈と思われる。

しかし、上記の文献学的調査から明らかなように、この理解には、第一のテーゼと同様、十分な根拠がなくなつたと言えよう。つまり、„aufliegen“ という、水平方向とかかわりの強い動詞があるからといって、„Baumstämme“ が横倒しになっていると理解しなければならない理由はないということである。

4.1.3. 立木の一部としての „Baumstämme“

第三は、弱いテーゼのうち一義化を試みるものであるが、これは、„Baumstämme“ を生木の幹と理解し、「立木」と解釈する。この見解では、たしかに „glatt aufliegen“ という動詞句との共起には疑問が残るが、作品全体の流れを考慮して、矛盾を含む無意味な文章を構成しないためには、「立木」と解釈するのが合理的だとされる。¹⁶⁾

この見解に関しては、動詞 „aufliegen“ が、生木の一部としての „Baumstämme“ が雪面という平面に立てて置かれているように「見える」(文副詞としての „scheinbar“) ことを表わしているとすれば、この理解に何ら特別の困難は生じない。それどころか、木が雪に埋もれているため、雪の上に現れ出ている幹の部分があたかも雪面にのっているかのように見えるということとして自然に理解できる。たとえば、本橋は、これを「錯覚的な印象」

として特徴づけている(本橋 1983: 90)。しかも, „fest mit dem Boden verbunden sein“ という述語についても, 特別の解釈を施す必要はなく, たとえば「大地にしっかり根をはっている」(„wurzeln“)といった意味で解釈できよう。

4.1.4. 丸太あるいは立木の一部としての „Baumstämme“

最後に, 弱いテーゼのうち両義的に理解可能であるという立場の研究は, „Baumstämme“ を「立木」と理解しても「丸太」と理解しても, 作品全体の総合的な解釈には影響を与えないと主張する(Steinmetz 1977)。

この両義的理解は, やはり動詞 „aufliegen“ の通常の意味にある程度こだわったために生じたものなので, 一方の「立木」という理解に限定しうる。

4.2. 意味論レベルか言語相互行為レベルか

従来提出されてきた見解は, もっぱら意味論レベルの分析に基づいていた。しかし, 文学作品だけでなくテキストというものは, 常に多層的である。語義を重視し, それにこだわり過ぎると, もしそれが否定された場合, 上述のようにその主張の根拠が容易に失なわれる可能性がある。したがって, テキスト内言語相互行為レベルを含めた, 作品を構成する言語構造全体からの分析が重要だと考えられる。なぜなら, それはテキストのダイナミズムを構成しているので, その点から意味論レベルでの対立あるいは矛盾は, さしあたり軽視できるからである。

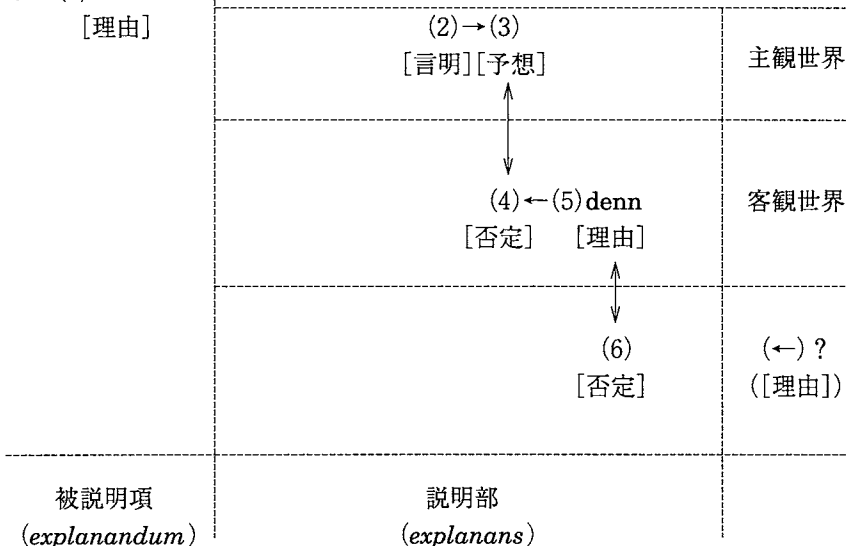
5. 結語: 作品全体の理解をめざして

以上のように, テキスト言語学的分析と文献学的な調査によって, この作品に関して議論されてきた, 事態提示レベルにおける動詞 „aufliegen“ をめぐる問題は解消されたことになる。¹⁷⁾ テキスト言語学の立場からの文学研究への寄与は, このように, 解釈の際の基盤を整備することにあると言える。しかし, これですべての問題が解決されたわけでは決してない。テキスト言語学の立場から, 今後さらに展開されるべき問題としては, 日常的な論弁性に関わる「歪み」の問題がある。

このテキストは、言語相互行為レベルにおいて、論弁性という性格をもち、整合的で結束性がある。しかし、前後が「開かれて」いるので、論弁の一部が切り取られ、独立したテキストとして提示されていると考えていい。問題なのは、そこでなされる二度にわたる否定である。ここで、文(1)から文(6)までの関係の図（図1）を再掲する。

[Argument]

? ←(1) Denn wir ~~haben~~ Baumstämme im Schnee



—図1〔再掲〕—

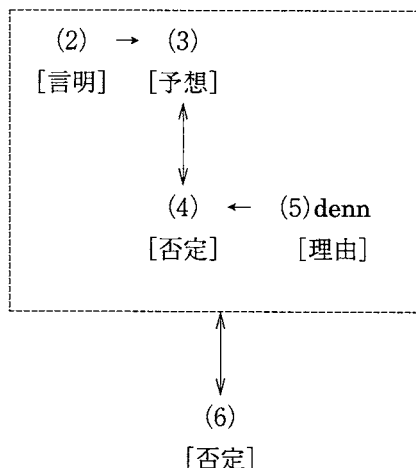
第一の否定（文(4)）は、知覚判断に基づく「主観世界」に関する「見掛け上」の言明（文(2)＋文(3)）に対してなされるが、それは、事実判断を可能にする「客観世界」（文(5)）を根拠とする。言い換えれば、文(2)＋文(3)は、文(5)で提示される「事実」の論理上の裏、つまり「反事実」を述べているにすぎない。つまり、文(4)による文(2)＋文(3)の否定は、容易に文(5)を導く。ところが、第二の否定（文(6)）は、「客観世界」に関わる言明に対してなされるので、その否定によってもたらされるはずの言明内容を予測す

ることは困難である。

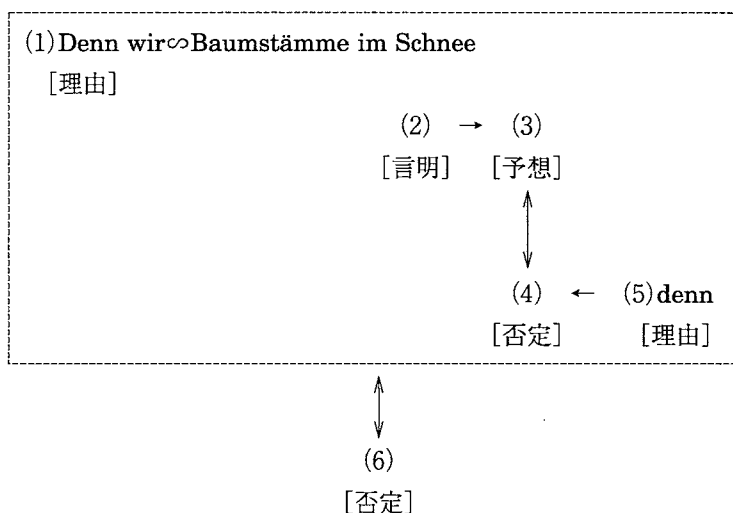
したがって、文(4)による文(2)+文(3)の否定と、文(6)による文(5)の否定との間には、かなりの距離があると言わざるをえない。言い換えれば、第一と第二の否定は、質的に性格が異なり、同一レベルで論じることはいできない。すでに見たように、場面性の度合いに関しても、第二の否定表現のほうがかなり強い。したがって、文(6)による否定は、直前の文(5)だけを否定しているとは考えにくい。とすると、**„Baumstämme im Schnee“** に関する説明的展開部全体 (文(2)から文(5)まで) を、あるいはさらに文(1)をも含めて、一段高いレベルから否定している可能性も考えられる。この可能性を図示すると、それぞれ図2と図3のようになろう。

(1) Denn wir ∞ Baumstämme im Schnee

[理由]



—図2—



—図 3—

いずれにしても、文(6)による否定は、文(5)を否定した結果、それまでの議論を否定し、破棄することになる。これを文芸学の用語を使って説明すれば、「宙づり」の構造をもつといえる。とすれば、意味論レベルでの「木の幹」の様態に関して、対立を強調するにしろ一義化を主張するにしろ、¹⁸⁾ その差異はそれほど重要な意味をもたなくなる。つまり、どの立場を採用したとしても、常に文(6)によって否定されてしまうからである。

とするなら、問題は意味論レベルにおける対象の在り方よりも、むしろテクスト内言語相互行為レベルにおける構造的な「歪み」にあると考えてもよからう。この問題は、文(1)の後に展開される比喩の説明部分に、場面性の高い表現によって日常的な論弁性という性格をもった相互行為がもちこまれることで生じる。その結果、この作品の形式的構造に通常の論理形式を破棄する構造が付与される。このように考えると、この作品は、特別な比喩の在り方、あるいは通常とは異なる思考形式を提示しているとも言える。たとえば、カフカの他の作品に *Von den Gleichnissen* (『寓意について』), *Kinder*

auf der Landstraße (『国道の子供たち』), *Der Brunnen*¹⁹⁾, *Die Flöte*²⁰⁾, *Auf der Galerie* (『天井桟敷にて』) などがある。こういった作品には、奇妙に思われる対話が含まれている。これらの対話を上述の観点から分析すると、その奇妙さの構造的特徴が明らかになる可能性がある。²¹⁾ Neumann は、カフカのアフォリズムに見られる特徴的な思考法として、反転とそらしを指摘している (Neumann 1968)。本章で提示した通常と異なる論理展開は、Neumann の指摘する思考法と関連がありそうだ。このような観点をも踏まえたテキスト構造の分析の、より積極的な展開が望まれる。

注釈

- 1) Triffitt (1985) は、『木々』に関して従来提出されてきたさまざまな見解を要領よく整理している。日本語文献では、永井(1983)が比較的詳しい。
- 2) この点について他の言語ではどのように訳されているのだろうか。比較のために、手元にある英語訳を挙げる。

The Trees

For we are like tree trunks in the snow. In appearance they lie sleekly and a little push should be enough to set them rolling. No, it can't be done, for they are firmly wedged to the ground. But see, even that is only appearance. (Translated by Willa and Edwin Muir: Nahum N. Glatzer (ed.): *The Collected Short Stories of Franz Kafka*. Harmondsworth: Penguin Books, 1988 (1983), S. 382. (= Franz Kafka: *The Penal Colony. Stories and short pieces*. New York: Schocken Books, 1976, S. 39-40. Translated by Willa and Edwin Muir.)

この英訳では、“lie” および “to set them rolling” における “rolling” という語から明らかのように、「倒木」の立場をとり、その理解を明示的に表現していることがわかる。

- 3) 訳語の「滑らかに」と「のっている」という表現どうしは、少なくとも日本語では、通常共起しえない。『広辞苑(第五版)』によれば、「なめらか」の意味は、「①すべすべしているさま。つるつるしているさま。[...]②すらすらと通るさま。つかえないさま。よどまないさま。[...]」(S. 2003) と説明されている。①は、表面の状態について、②は、移動の際の様態についての意味である。ところで、「のっている」という複合動詞は、ある物がある場所に「のる」という動作が完了して、置かれている状態について述べるものである (金田一 1988: 108, 時枝 1987: 80)。つまり、通常①の表面や、②の移動とも関係づけできない。この訳語は、翻訳書や論文などでも無思慮に使用されているようである。たとえば、「それは滑らかに雪の上に載っているように見える」

(マックス・ブロー特編『決定版カフカ全集1』(円子修平訳), 新潮社, 1980, S.29), 「みたところそれは雪のうえになめらかに載っている」(本橋 1983:83)。『木々』での „glatt“ の意味は、後で見るように、作品の後半部に出てくる „fest“ と対立する表現として使用されている。つまり, *Deutsches Universalwörterbuch* (DUW) の説明を借りれば, „ohne sichtbare, spürbare Unebenheiten“ ではなく, „an der Oberfläche so beschaffen, dass es keinen Halt bietet; rutschig, glitschig“ の意味に相当する (DUW 1996:614)。したがって, 「のっている」との関連で「滑らかに」という訳語の選択に問題なしとしない。この作品に関する翻訳の問題については, 西嶋 (1994) [本書補論] を参照のこと。

4) この作品のより詳細なテキスト言語学的分析については, 西嶋(1989)を参照のこと。下川(1978)によれば, テキストは, (言行為部 (世界構築部 (記述部))) という入れ子型三層構造をもつとされる (24頁以下)。本章で論じられる「意味論レベル」と「テキスト内言語相互行為レベル」は, それぞれ下川(1978)の「世界構築部」と「言行為部」に相当する。前者は, テキストによって提示される意味世界を対象とし, 後者は, 会話参与者どうしの言語行動のやり取りに注目する。なお, 「読書行為」という, テキストに対する読者の言語行為については, 本章ではふれない。

5) 引用は校訂版(Kritische Ausgabe)によった。*Die Bäume* は, もともと *Beschreibung eines Kampfes* (『ある戦いの記録』)の一部を取り出して作品として独立させたテキストである。*Beschreibung eines Kampfes* には, 異なる時期に書かれた A 稿(Fassung A)と B 稿(Fassung B)とがある (Franz Kafka: *Beschreibung eines Kampfes. Die zwei Fassungen. Parallelausgabe nach den Handschriften. Herausgegeben und mit einem Nachwort versehen von Max Brod. Textedition von Ludwig Dietz. Frankfurt/M: S.Fischer Verlag, 1969*)。以下に両稿の当該部分を挙げておく。

FASSUNG A:

Wir sind nämlich so wie Baumstämme im Schnee. Sie liegen doch scheinbar nur glatt auf und man sollte sie mit kleinem Anstoß wegschieben können. Aber nein, das kann man nicht, denn sie sind fest mit dem Boden verbunden. Aber sieh, sogar das ist bloß scheinbar. (S.122)

FASSUNG B:

Weisst Du denn schon, dass wir so sind, wie Baumstämme im Schnee? Die liegen doch scheinbar nur glatt auf und man sollte sie mit kleinem Anstoss wegschieben können. Aber nein, das kann man nicht, denn sie sind fest mit dem Boden verbunden. Schon gut, aber selbst das ist bloss scheinbar. (S.123)

この作品 *Die Bäume* は, A 稿から採取され, まず *Hyperion* (1908年)に発表された。その後, *Betrachtung* というタイトルの本の一部として1912年に出版された (vgl. *Drucke zu Lebzeiten Apparatband* : 33ff.)。

- 6) この「対話」には、二つの可能性が考えられる。一つは、個人内部における「対話」である。個人内で、まず一つのテーゼが発せられ、同一個人がそのテーゼを否定するという構造である。他の一つは、二者間の文字どおりの「対話」である。このテキストの「対話」を同一人物が語っていると考える必然的な理由はなく、二者間の相互行為とみなすことも十分に可能である。
- 7) なお、Beickenによれば、この作品で示されるような「パラドクスの環」は、カフカの比喩のプロトタイプと規定される (Beicken 1974: 239)。この議論に対して Steinmetz が批判している (Steinmetz 1977)。また、パラドクスの環に基づいたカフカの他の作品の興味深い分析としては、野口 (1987) がある。
- 8) ある言語相互行為において、議論の際に使用される特定の表現形式が用いられ、実際に議論という形式が認められる場合、論弁性があるという。論弁性という特徴をもつ相互行為は、「対立的協調」という性格をもつ。その分析例は、Reinelt (1983), 丸井 (1989), Marui (1995), Marui *et al.* (1996) に見られる。理論的記述は、丸井 (1992) を参照。
- 9) たとえば、ある辞書によれば、„Baumstamm“ の項目には、„ein dicker, dünner, schlanker, rissiger, abgeschälter, gespatener B.; diesen B. können drei Männer nicht umspannen; im Grase lag ein B.; sich auf einen B. setzen; die Baumstämme flußabwärts flößen; e. Floß, Hütte aus rohen, unbehauenen Baumstämmen“ という記述が見える。用例として、切り取られた幹が多いことがわかる (Klappenbach/Steinitz 1978: 437)。また、逆に、生木を中心に語義を説明している辞書もある: „senkrecht gewachsener fester, verholzter Teil des Baumes, über den sich die verästelte, laub- od. nadeltragende Krone erhebt“ (*Duden Das große Wörterbuch* Bd. 1: 419)。
- 10) この点について、たとえば永井 (1983) は倒木と解釈し、つぎのように説明している。

この雪に埋もれた樹々については、二通りに考えることができるだろう。ひとつは、根元を雪に覆われて雪の中に立っている樹々の姿であり、もうひとつは、雪の中に横倒しになった樹々の幹、つまり丸木 (材木) であるが、筆者は後者の見解をとっている。というのは、最初から根のない、大地から切り離された丸木の有様こそ、ここで問題となっている人間の状況に対応するものである、と考えるからである。(永井 1983: 54)

他方、Triffitt (1985) は立ち木の立場をとっている:

For it makes a great deal of difference whether, as Richter and Kobs imply, man is being compared to something already dead, something severed from the earth, or to something living and rooted in the earth. Furthermore, if the tree-trunks are taken to mean felled logs, it makes nonsense of the notion that they could even apparently be 'fest mit dem Boden verbunden'. (...) Despite the verb 'aufliegen', therefore, the tree-trunks must be interpreted as

belonging to living, standing trees, unless on is predetermined to make non-sense of the work. (Triffitt 1985 : 60-61)

- 11) 文(1)の „wie“ は、接続詞と解釈できる。*Die Bäume* が採取された *Beschreibung eines Kampfes* (Fassung A と Fassung B) の当該箇所では、接続詞として使われていることがわかる (注5を参照)。

Wir sind nämlich so wie Baumstämme im Schnee. (Fassung A)

Weisst Du denn schon, dass wir so sind, wie Baumstämme im Schnee ?

(Fassung B)

したがって、文(1)の „Denn wir sind wie Baumstämme im Schnee.“ は、„Denn wir sind wie Baumstämme im Schnee sind / liegen / aufliegen.“ と書き直すことができよう。とすれば、英語 “be” 動詞の変化形 “are” に相当する „sind“ (*sein* 動詞) は、単なるコープラ (Kopula) ではなく、「存在」の意味で使用されていることがわかる。

- 12) „aufliegen“ という動詞のカフカ作品における他の用例を挙げておく。なお、下線は筆者による。

例(1)

Ich sah, den Kopf auf den Arm gelegt, der auf hölzernen Lehne der Bank auflag, die wolkenhaften Berge des andern Ufers und hörte eine zarte Geige, die jemand im Strandhotel spielte. (*Beschreibung eines Kampfes*, NS I, S. 63-64)

ここでは、„Arm“ (腕) が „hölzernen Lehne der Bank“ (ベンチの木製の背もたれ) の上に置かれていることが表現されている。

例(2)

Als einmal das Mädchen nicht gekommen war und ich unwilling auf die Betenden blickte fiel mir ein junger Mensch auf, der sich mit seiner ganzen magern Gestalt auf den Boden geworfen hatte. Von Zeit zu Zeit packte er mit der ganzen Kraft seines Körpers seinen Schädel und schmetterte ihn seufzend in seine Handflächen, die auf den Steinen auflagen.
(*Beschreibung eines Kampfes*, NS I, S. 84-85)

この用例では、„Handflächen“ (手のひら) が手の甲を裏にして „Steinen“ (敷石) の上に平らに置かれていることを表わしている。

例(3)

- Also hier ist das Bett, wie ich sagte. Es ist ganz und gar mit einer Wattedeschicht bedeckt; den Zweck dessen werden Sie noch erfahren. Auf diese Watte wird der Verurteilte bäuchlings gelegt, natürlich nackt; hier sind für die Hände, hier für die Füße, hier für den Hals Riemen, um ihn

festzuschmallen. Hier am Kopfende des Bettes, wo der Mann, wie ich gesagt habe, zuerst mit dem Gesicht aufliegt, ist dieser kleine Filzstumpf, der leicht so reguliert werden kann, daß er dem Mann gerade im den Mund dringt. (In der Strafkolonie, DL, S. 207-208)

ここでの主語は, „der Mann“ (その男=囚人) である。この場合, „Gesicht“ (顔) が „Kopfende des Bettes“ (ベッドの上の部分) に置かれていると考えられる。つまり, 男が顔をふせた状態でベッドに横になっているという用例である。

- 13) これらの複数のテーゼからの選択は, たとえば, この作品テキストが収められている *Betrachtung* という作品集, このテキストの原型が収められている *Beschreibung eines Kampfes*, カフカ作品全体, カフカという個人, カフカを取り巻く時代状況といった作品外の情報によって決定されることが多いようだ。これまでの文学研究では, 必ずしも, テキスト自体の分析に主眼がおかれてきたわけではない。本章は, そのテキスト自体を丁寧に分析することを提案するものである。
- 14) 三原 (1988: 100)。なお, 「スライドするパラドクス」については, Neumann (1968) と Hiebel (1999) も参照。
- 15) Richter (1962), Bezzel (1964), Kobs (1970), 永井 (1983), 西嶋 (1989) など。
- 16) 植松 (1960), 本橋 (1983), Triffitt (1985) など。
- 17) この作品での動詞 „aufliegen“ の用法は, 社会言語学的には, カフカ固有のもの, つまり, 個人特有の言語使用 (Idiosynkrasie) によるものでもありうる。ところが, この作品の現代の読者 (論者も含めて, とくに作品を外国語として読む者) は, ラング (langue) 次元の辞書用法に頼らざるをえない。この両者の矛盾は, 解消されたとは言えない。なお, Wagenbach は, プラハ・ドイツ語 (Prager Deutsch) について解説している (Wagenbach 1988: 55ff.)。プラハ・ドイツ語と, 当時の標準ドイツ語あるいは現代標準ドイツ語との社会言語学的違いは, 興味深いテーマではあるが, 資料の限界により, ここでは考慮の外にある。
- 18) 文献学的分析が示しているように, 動詞 „aufliegen“ が, 方向性とは無関係で, 接触到に重点を置いた動詞と考えてさしつかえないなら, 二つの述語によって表わされる „Baumstämme“ の状態は, 論理的に4つの可能性がある (略語の説明: 「立」=立木; 「横」=横倒しの丸太): ①立-立; ②立-横; ③横-横; ④横-立。従来の研究では, この可能性のうち, ①, ③, ④が提出されている。意味論レベルに関して, このいずれの立場を採用するかは決定は, その有意義度によって判断される。その有意義度は, 「解釈者」のもつ, 作品外の枠組みによって決定される。この枠組みは, 文学研究というコミュニケーション上の規範と関係していると言えよう。なお, 解釈とその翻訳への影響については, 西嶋 (1994) を参照。
- 19) つぎのテキストからとった。なお, 表題がないので, 仮に „Der Brunnen“ と名づけておく。Franz Kafka: *Nachgelassene Schriften und Fragmente II*. Hrsg. von Jost Schillemeit, Frankfurt/M.: Fischer Taschenbuch Verlag, 2002, S. 338-339.

20) つぎのテキストからとった。表題がないので、仮に „Die Flöte“ と名づけておく。

Franz Kafka : *Nachgelassene Schriften und Fragmente II*. Hrsg. von Jost Schillemeit, Frankfurt/M. : Fischer Taschenbuch Verlag, 2002, S.358.

21) 西嶋 (2000, 2001a, 2001b) は、その試みのひとつである。

作品

[DL] Franz Kafka : *Drucke zu Lebzeiten*. Hgg. von W. Kittler, H.-G. Koch und G. Neumann. Kritische Ausgabe, Frankfurt/M. : Fischer Taschenbuch Verlag, 2002.

[DL-App] Franz Kafka : *Drucke zu Lebzeiten Apparatband*. Hgg. von W. Kittler, H.-G. Koch und G. Neumann. Frankfurt/M. : Fischer Taschenbuch Verlag, 2002.

[NS I] Franz Kafka : *Nachgelassene Schriften und Fragmente I*. Hg. von M. Pasley. Kritische Ausgabe, Frankfurt / M. : Fischer Taschenbuch Verlag, 2002.

[TB] Franz Kafka : *Tagebücher*. Hgg. von H.-G. Koch, M. Müller und M. Pasley. Kritische Ausgabe, Frankfurt/M. : Fischer Taschenbuch Verlag, 2002.

[全集 1] マックス・ブロート編『決定版カフカ全集 1』円子修平訳, 新潮社, 1980.

[全集 7] マックス・ブロート編『決定版カフカ全集 7』谷口茂訳, 新潮社, 1981.

参考文献

—Beicken, Peter U. : *Franz Kafka. Eine kritische Einführung in die Forschung*. Wiesbaden : Athenaion, 1974.

—Bezzel, Christoph : *Natur bei Kafka. Studien zur Ästhetik des poetischen Zeichens*. Nürnberg : Verlag Hans Carl, 1964.

—Coulmas, Florian : *Routine im Gespräch. Zur pragmatischen Fundierung der Idiomatik*. Wiesbaden : Athenaion, 1981.

—Hiebel, Hans H. : *Franz Kafka : Form und Bedeutung*. Würzburg : Königshausen und Neumann, 1999.

—池田浩士／好村富士彦／小岸昭／野村修／三原弟平 : 『カフカの解説』, 駸々堂, 1982.

—Kobs, Jörgen : *Kafka. Untersuchungen zu Bewußtsein und Sprache seiner Gestalten*. Bad Homburg : Athenäum, 1970.

—金田一春彦 : 『日本語』 (新版), 下巻, 岩波書店, 1988.

—丸井一郎 : 「相互行為とテキスト理解」, 日本独文学会中国四国支部研究発表会発表原稿, 1989.

— : 「談話の相互行為的基盤と『協調』の概念」, 日本独文学会『ドイツ文学』第88号, 1992, 89-100.

—Marui, Ichiro : „Argumentieren, Gesprächsorganisation und Interaktionsprinzipien —Japanisch und Deutsch im Kontrast—“. In : *Deutsche Sprache*, Heft

第1章 *Die Bäume* (『木々』)のテキスト言語学的構造分析

4/1995, 352-373.

- Marui, Ichiro / Nishijima, Yoshinori / Reinelt, Rudolf: „Argumentativity in Everyday Conversation – Examples from Japanese, English, German and other languages –“, 『高知大学学術研究報告』第45巻, 1996, 83-113.
- 三原弟平: 「スライドするパラドクス —カフカにおけるイメージの変遷と現実—」, 『言語の冒険』(講座20世紀の芸術5), 岩波書店, 1988, 89-129.
- 本橋右京: 「カフカ試論Ⅰ —『樹木』を形成する視点—」, 都立大学大学院『独文論集』第2号, 1983, 82-92.
- 永井邦彦: 「『ある戦いの記述』から『観察』へ —カフカ初期作品についての一考察—」, 阪神ドイツ文学会『ドイツ文学論攷』第25号, 1983, 45-58.
- Neumann, Gerhard: „Umkehrung und Ablenkung: Franz Kafkas »Gleitendes Paradox«“. In: *Deutsche Vierteljahrsschrift* Nr.42, 1968, 702-744.
- 西嶋義憲: 「カフカの *Die Bäume* の構造分析の試み —テキスト言語学の視点から—」, 広島独文学会『広島ドイツ文学』第4号, 1989, 29-48.
- : 「翻訳・解釈・翻訳文体論? —カフカのテキスト *Die Bäume* をめぐって—」, 『広島ドイツ文学』第8号, 1994, 45-61. [本書補論に収録]
- : 「カフカ作品における対話の『歪み』 —*Von den Gleichnissen* のテキスト言語学的分析—」, 日本独文学会中国四国支部『ドイツ文学論集』第33号, 2000, 5-14. [本書第2章に収録]
- : 「カフカ作品における次元の転換 —ある「断片」を例にして—」, 『金沢大学文学部論集言語・文学篇』第21号, 2001a, 81-93. [本書第4章に収録]
- : 「カフカのテキスト *Kinder auf der Landstraße* における対話の分析 —繰り返しの技法—」, 金沢大学言語教育研究センター『言語文化論叢』第5号, 2001b, 161-174. [本書第3章に収録]
- 野口広明: 「カフカ論Ⅱ —パラドクスの輪—」, 『九州ドイツ文学』第1号, 1987, 131-153.
- Reinelt, Rudolf: „JAKOP und WEKOP —eine Begegnung—“, 『愛媛大学教養部紀要』第16号, 1983, 215-241.
- Richter, Helmut: *Franz Kafka. Werk und Entwurf*. Berlin: Rutten & Loenig, 1962.
- 下川浩: 「文結合関係命題相互関係 —全体テキストの階層的構成—」, 『エネルギー』第5号, 1978, 17-34.
- Steinmetz, Horst: *Suspensive Interpretation. Am Beispiel Franz Kafkas*. Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1977.
- 時枝誠記: 『日本文法口語篇』(改版), 岩波書店, 1987 (初版1978).
- Triffitt, Gregory B.: „Kafka, Paradox and *Die Bäume*“. In: *Journal of the Australasian Universities Language Association*. No.63, 53/64, 1985, 53-64.
- 植田康成: 「パラダイムの転換?」, 『金沢大学文学部論集文学科篇』第5号, 1985, 67

-79.

- 植松健郎：「カフカの短編への一考察」,『大阪工業大学紀要人文篇』第4巻第1号, 1960, 40-45.
- Wagenbach, Klaus : *Franz Kafka. Mit Selbstzeugnissen und Bilddokumenten.* Reinbek bei Hamburg : Rowohlt, 1964.

辞書

- Duden Das große Wörterbuch der deutschen Sprache in acht Bänden.* 2., völlig neu bearbeitete und stark erweiterte Auflage. Hrsg. und bearb. vom Wissenschaftlichen Rat und den Mitarbeitern der Dudenredaktion unter der Leitung von G. Drosdowski. Mannheim/Wien/Zürich : Duden Verlag, 1993.
- DUW : *Duden Deutsches Universalwörterbuch.* Hrsg. Vom Wissenschaftlichen Rat und den Mitarbeitern, 3., völlig neu bearb. und erw. Auflage. Mannheim/Wien/Zürich : Duden Verlag, 1996.
- 新村出編：『広辞苑』第五版, 岩波書店, 1998.
- Wörterbuch der deutschen Gegenwartssprache.* Hgg. von R. Klappenbach u. W. Steinitz. Neunte, bearbeitete Auflage, Band 1, Berlin : Akademie-Verlag, 1978.

[補論] 解釈と翻訳

—カフカのテキスト *Die Bäume* の日本語訳をめぐる—

0. はじめに

カフカのテキスト *Die Bäume* (『木々』) は、一般の読者向けに訳され出版される翻訳だけでなく、必ずしも専門家を対象にしていない解説書・啓蒙書や雑誌、あるいはまたカフカ作品の専門的研究文献などの中にも引用され訳されることがある。入手できた範囲内に限定してそれらの訳を合計すると、22例(複数の同一訳文は1例として計算)にのぼる。

ところで、一般に、「文学作品」と呼ばれるテキストを翻訳する際には、とくに解釈という問題がかかわってくる。いわゆる文学作品は複数の解釈(読み)を許容することがあるからだ。それを翻訳するには、テキスト自体を言語学的に正確に理解することはもちろん必要だが、さらに、どの情報を優先させて訳出するかという問題と取り組まねばならない。複数の可能な解釈を許すテキストなら、そのようなあいまい性が伝わるように訳出するのか、あるいはそこから一つの解釈を選択して訳出するのか、という問題だ。後者の場合、もし解釈の違いが翻訳に反映されたとしたら、それはどのように、どの程度反映されうのか、あるいは反映されるべきなのか。この問題を、複数の解釈を許容するカフカのテキスト *Die Bäume* を利用することにより考察する。

なお、本補論は、本来なら第二部に配置されるべき内容であるが、取り扱っているテキストが前章のと同じなので、その直後に置くこととした。

1. 分析の枠組み

1.1. 分析の焦点と枠組み

まず、分析対象となるカフカのテキスト *Die Bäume* を引用しておく¹⁾：

Die Bäume

Denn wir sind wie Baumstämme im Schnee. Scheinbar liegen sie glatt auf, und mit kleinem Anstoß sollte man sie wegschieben können. Nein, das kann man nicht, denn sie sind fest mit dem Boden verbunden. Aber sieh, sogar das ist nur scheinbar.

本補論ではとくに、人称代名詞 „wir“ と比較される „Baumstämme im Schnee“ (= (1)) の状態の解釈に関わる部分に焦点をあてる。つまり、この表現によって指示される対象の状態の可能性を、その述語によって提示される様態との関係で調べる。具体的には、„sie“ (= „Baumstämme im Schnee“) を主語とする2つの述語の „[...] liegen sie glatt auf“ (= (2)) ; „[...] sie sind fest mit dem Boden verbunden“ (= (3)) である。

述語が(2)と(3)の2種類あるので、それによって描かれる „Baumstämme im Schnee“ の様態は、それぞれの述語が提示する世界の組み合わせから、論理的には少なくとも4つの可能性がある：①立木－立木；②立木－倒木；③倒木－立木；④倒木－倒木。この4つにさらに、⑤積極的にどちらの状態とも明言しない、テキストのもつ曖昧さを提示する解釈も付け加えることができる。²⁾ ところが、以下で見るように、実際に提出されているのは、そのうち立木 (=①)；倒木 (=④)；パラドクス (=③) の3つの解釈である。パラドクスは、②についても想定可能であるが、その解釈は提出されていない。³⁾ 曖昧さ提示 (=⑤) については、少なくとも2つの説明がある。一つは、テキストが本来もつ曖昧性を提示するための積極的な立場のもの。他の一つは、積極的に読みを限定することができないという理由に基づく消極的な考えによるもの、の2つである。

1.2. 仮説設定

Die Bäume の訳文が現われるテキストは、それが予想する対象読者の違いにより、大きく次の3種類に分けられる：

[A-TYPE: 翻訳 (日本語訳のみ)] :

一般読者を対象にして市販される翻訳。当然ながら、原文は付属していない:たとえば、『カフカ全集』など。

[B-TYPE: 非専門文献 (メタテキスト+日本語訳)] :

必ずしも専門家を対象にしていない解説書・雑誌などに引用される翻訳。原文は基本的に挙げられていない:たとえば、『ユリイカ』、『カフカの解説』など。

[C-TYPE: 専門文献 (メタテキスト+原文+日本語訳)] :

基本的にはドイツ文学研究者を対象として予想している研究書あるいは論考に提示される便宜的な訳文。通常、原文が提示されることが多い:たとえば、専門雑誌論文、紀要論文など。

たとえばドイツ語という同一言語内において、あるテキストの対象とする読者層が異なると、それに応じて表現法などに違いが起こりうることが知られている (vgl. Sandig 1978)。これと同様の社会言語学的な発想に基づき、上記のように訳文が現われるテキストを、予想される対象読者の違いによって3つのタイプに分類した。この異なるコンテキスト (使用条件) の違い、換言すれば、翻訳テキスト理解の際の訳文に対する依存度の違いが、訳文の表現あるいは文体に何らかの影響を与えている可能性があると予測できる。

また、上記3タイプの訳文の機能は、それぞれのテキストタイプの訳者の意図に応じて異なりうる。[A-TYPE]に属する翻訳には原文が付随していず、それ自体で独立して読まれることが前提されている。そのため、テキストが完結していて、訳文だけで十分に理解できるような日本語文でなくてはならない。他方、[B-TYPE][C-TYPE]に属する解説・研究論文に引用される訳文は、それを説明するメタテキストに対して補助的な役割を演じるので、必ずしもそれ自体で理解できるものである必要はない、と推定できる。[B-TYPE]も[A-TYPE]と同様に一般読者を対象にしているので、原文は挙げられていないのが普通である。ところが、[C-TYPE]には、原文も提示されている。この説明はむしろ逆で、原文に訳文が付随的に提示されていると理解すべきである。

ところで、*Die Bäume* は、独立した作品として短編集 *Betrachtung* (『観察』) に発表されたものであるが、もともとは *Beschreibung eines Kampfes* (『ある戦いの記録』) の一部として書かれていた。したがって後者には、前後の文脈が存する。⁴⁾ この文脈内では、2人の対話の一部として描かれている。したがって、対話する人物が特定されうるので、それに応じたやりとりの表現として訳出されるなど、このコンテキストが翻訳に影響を与える可能性がある。

*

以上の議論をまとめて、2つの仮説として提示しておく：

仮説①：*Die Bäume* の翻訳の表現は、予想される対象読者の差に基づいて設定された3つのテキストタイプに依存して異なる。具体的には、[A-TYPE],[B-TYPE],[C-TYPE]の順に翻訳テキストの独立・完結度が低くなる。とくに [A-TYPE：翻訳] に属する訳文は、他の2つのテキストタイプでは補助的な機能しかもたない訳文とは異なり、その日本語だけで十分理解可能である必要がある。したがって、そこでは内容や解釈の立場が明確に表現されるはずである。すなわち、多様な解釈が許されるように曖昧さを残すか、そのような曖昧さを排除し、一つの解釈を積極的に提示するかのも明確な選択がなされている。

仮説②：*Beschreibung eines Kampfes* に埋め込まれている、*Die Bäume* のもとになったテキストは特定の人物どうしの対話というコンテキストによって制約を受けているので、その状況にふさわしい具体的な会話表現としての文体価値をもった形式で訳出される。他方、*Die Bäume* のほうは、そのようなコンテキストが捨象されているので、必ずしも会話のように訳される必要はなく、かなり抽象的な訳文になる。

2. 日本語訳例

2.1. 訳文と解釈

この作品の日本語訳は、同一訳文を1例として計算すると、22例ある。本文に引用すると繁雑になるので、まとめて[資料編]として本補論末尾に掲げておいた。

訳文の表現から1つの解釈を明確に打ち出していると読み取れるのは、[A-TYPE]は5例中3例(60%), [B-TYPE]は4例中2例(50%), [C-TYPE]13例中5例(38%)で、この順番で、一義的に読みを限定する解釈は減少するが、有意味な差とは言えない。しかし、傾向としてはあるが、[A-TYPE]が[C-TYPE]と比べて、一義的に明確な解釈を提示していることがわかる。

他方、訳文の表現からは判断できないが、本文の解説テキストにおいて一つの読みを提示しているものもある。これが可能なのは、[B-TYPE]と[C-TYPE]という、説明文があるものに限られる。[B-TYPE]で、本文において一つの読みを提出しているのは、4例中2例ある。ただし、その2例は、同一著者による、同一の解釈なので、実質的には、3例中1例と考えるべきものであろう。[C-TYPE]については、13例中3例が、本文内で解釈を一つに絞っている。

とすると、残りの訳文は、テキスト自体のもつ曖昧さを明確に訳出したものであろうと予測することになるが、そうとは簡単に言えない。なぜなら、訳文の表現からも、解説文からも、そのような曖昧さを積極的に明示しようとしているのか、それとも、単に辞書的訳語をあてているだけなのか、判断ができないからだ。曖昧な訳については、[A-TYPE]が5例中2例、[B-TYPE]が0例、[C-TYPE]が13例中5例である。

以上のことから、仮説①で提出した、[A-TYPE]では明示的に特定の解釈が現われるという予測は、明確に肯定することはできないが、ある程度の傾向があることは見いだせた。

ところで、この訳例を見てすぐ気づくことは、„Baumstämme im Schnee“の状態に関して「立木」と「倒木」の二様の解釈が訳文にある程度反映されるということである。「立木」という理解が訳文に明示されているのは22例中7例あり、他方「倒木」を示しているのは3例である。この両者の立場を

合計すると10例になるので、読みを一つに限定している訳文は、全体の45%となる。残り12例は、読みをとくに一つに限定せず、両義的（あいまい）なままにしているので、どちらの状態とも解釈できる。その中に含まれるパラドクスの解釈は、訳文に全く反映されていない。

「立木」という立場を明確に訳出する手段として、「立つ」、「根を張っている」といった、原文にはない表現が意識的に用いられている。他方、「倒木」については、たとえば「[切り倒されて]」といった補足がなされたり、「横たわって」という表現が意識的にとられている。このように、どの立場の解釈に基づくかによって、あるテキストの同一表現の翻訳が異なってくる。そこで、さらに訳文をより詳細に検討してみることにする。

2.1.1. „Baumstämme im Schnee“ と „[...] liegen sie glatt auf“

„Baumstämme im Schnee“ (= „sie“) とそれを説明する „[...] liegen sie glatt auf“ について、「立木」と「倒木」の2つの立場を比較してみよう。

まず、「立木」の立場についてである。「立木」という解釈を明示的な言語表現を用いて提示する訳文7例のうち、「Baumstämme im Schnee」という名詞句の訳文として「雪中に立つ樹の幹」、「雪の中に立つ樹の幹」などのように「立つ」といった垂直方向を指示する表現をともなった訳は4例あり、全体の57%を占める。ところが、「[...] liegen sie glatt auf」という、通常水平方向と関連づけされ易い動詞句が、たとえば「すらりと立っていて」のように垂直方向を指示する形で訳されている例は7例中2例で、全体の28%に過ぎない。

つぎに、「倒木」の立場であるが、「倒木」という解釈を明示的に提示する訳文3例のうち、「Baumstämme im Schnee」の部分の訳文として水平方向を示唆する表現を用いている例は、1例しかない。しかも、それは、[]を用いて説明的に補足されたものである。ところが、「[...] liegen sie glatt auf」を、たとえば「平らかに横たわっていて」というように水平方向を指示する表現として訳出しているものは、3例中3例で、すべてである。

上述の2つの対立する読みの対照的な関係は、解釈の立場と、「aufliegen」という動詞の辞書的意味との対立によって生じたものと考えることができる。

すなわち、その動詞の意味は、通常、水平方向を指示するので、「立木」という解釈を採用した場合、「立つ」といった垂直方向を表わす表現とは基本的に馴染まないことになる。そこで、前もって *„Baumstämme im Schnee“* の箇所には垂直方向を含意するような表現をあてるという手段を選択したと推定される。ところが、「倒木」の解釈では、*„aufliegen“* の辞書的意味とまったく矛盾しないので、水平方向を指示する訳文が現われることになる。⁵⁾ したがって、解釈と訳語の選定にはある種の関連があることがわかる。

2.1.2. *„[...] sie sind fest mit dem Boden verbunden“* と「根」

„sie“ (= *„Baumstämme im Schnee“*) を主語とする第2文 *„[...] sie sind fest mit dem Boden verbunden“* の部分の訳語に、「根を張っている」といった、具体的で明瞭な表現を用いているものは、「立木」という解釈をとっている7例のうち5例(71%)ある。ところが、「倒木」の立場では、具体的なイメージが喚起されるような訳をしているものは、皆無である。「倒木」の場合、通常地面と直接に結びついているはずはないので、*„[...] sie sind fest mit dem Boden verbunden“* の内容を具体的に提示することは困難だからであろう。⁶⁾ また、両義的(あいまい)に訳されている日本語においても、具体的なイメージを喚起させる訳文はまったく見られない。

*

上述の2点から、解釈された *„Baumstämme im Schnee“* の様態と、テキストに含まれる表現の文字どおりの意味とがうまく馴染む場合は、必ずしもその辞書的意味に捕らわれない自由な(dynamisch)訳が行なわれるが、そうでない場合は、無難に逐語的に訳されることが多いという傾向が見てられる。

2.2. 不自然な訳語

訳語として不自然なものもある。テキストの中で、たとえば、*„glatt“*, *„aber sieh“* を訳出しているであろう日本語は、極めて不適切と言わざるをえないので、あえてここで取り上げておく。

2.2.1. „glatt“

この „glatt“ という副詞は、後半の „fest“ という副詞との対比的使用により、木の幹 (»Baumstämme“) が雪面に対してどのような様態で存在しているのかを表現していると考えられる。つまり、直後の „aufliegen“ を修飾することにより、„auf“ という状況を強調しているに過ぎないと判断される。もしこの理解が正しいとすると、かなり理解困難な訳語も見られる。

解釈の4つの立場ごとに調べてみよう。[]内は、テキストタイプを表わす。

- －「立木」(付随するメタテキストで立場が表明されているものも含める。以下同様) 10例：

「なめらかに」(「なめらかに」[C] 2例＋「滑らかに」[C] 1例) 計3例、

「すべすべと」[A][C]各1例、

「するりと」[A] 1例

「すらりと」[B] 1例

「すんなりと」[C] 1例

「だけ」[A] 1例

「そっと」[C] 1例。

- －「倒木」全3例：

「すべすべと」[C] 2例、「平らかに」[B] 1例。

- －「パラドクス」全2例：

「滑らかに」[B] 「滑(すべ)らかに」[B]各1例。

- －「あいまい (両義的)」全7例：

「滑らかに」([A] 1例＋[C] 3例) 計4例、

「たいらに」(「たいらに」[A][C]各1例＋「平らに」[C] 1例) 計3例。

これらの訳語は、大きく3タイプに分類できる。第1は、摩擦が少なく今にも滑り出しそうな様態に焦点をあてる「なめらかに」タイプ(なめらかに・すべらかに・すべすべと・するりと)。第2は、単に置かれているということ強調する「たいらに」タイプ(たいらに・たいらかに・だけ・そっと)。

最後は、それ以外のタイプ（すなりと・すなりと）。

さまざまな訳語が見られるが、テキストタイプによる差異は認められない。また、たとえ „Baumstämme im Schnee“ の方向性に違いがあっても、横断的に同一の訳語が使用されているので、解釈の立場に基づく訳語の有意な差は認められない。単に、辞書的意味を無批判に使用しているだけのようだ。ただし、「立木」の解釈には、他のそれに比べて、訳語の種類が多い点は指摘できる。

2.2.2. „aber sieh“

„Baumstämme im Schnee“ の状態の読みとは直接関係ないが、„aber sieh“ の訳も注目に値する。「だが／しかし／でも」と「見よ／見たまえ／見るがよい／ごらん」の語彙の組み合わせが、22例中16例で、全体の72%を占める。この作品状況での使用では、„sieh“ の指示対象は眼前にはない。„Baumstämme im Schnee“ は、比喩として挙げられているにすぎないからである。すると、たとえば「見よ」といった強い意味の訳はこのテキストでは、不自然と言わざるをえない。ここではむしろ、„aber“ と結びついて、明らかに注意喚起行為という機能をもつだけである。したがって、強く訳出する必要はないだろう。たとえば、「しかした」(資料編[A-1][C-5])や「ところがどうだ」(資料編[A-4])がより適切と言えよう。

2.3. 仮説①の評価

訳者は、翻訳文というテキストによって何を行なおうとしているのか？ 翻訳テキストの機能はそれが属するテキストタイプによって異なるはずだという前提のもと、この疑問に答えようとしてきた。すでに見たように、*Die Bäume* というテキストの訳文に関して、仮説①は明確に肯定できず、単に傾向があると確認できたにすぎない。他方、解釈の違いが訳文に反映されるのか、という問題については、確認できた。しかし、その反映の仕方や程度が、テキストタイプによって異なるという点は、はっきりとは確認できなかった。仮説①が十分に明確に肯定されなかった理由としては、少なくともつぎの4つの説明が可能である。

第1は、問題設定の不備である。つまり、訳文はそれが属するテキストタイプによって異なった現われ方をするという発想自体が誤りだという理由である。第2は、仮説①は適切であるが、対象として選択したテキスト類に誤りがあったと考える。つまり、「文学作品」というテキストではなく、実用文を対象にすれば、適切に仮説①が検証できたはずだと推測する。第3の理由は、ドイツ語を日本語に移すという作業を行なう訳者の意識に還元されるもの。つまり、自らの解釈を積極的に訳出しようとはしないで、「安全な」いわゆる逐語訳という辞書の訳語を利用して処理したがる訳者によって翻訳されたものを対象にしたという理由。第4は、第3と関連するが、訳文と解釈の立場とは直接に関係しているわけではないという理由である。したがって、訳文からどの解釈を採用しているのか判断し、分析することは不可能と考える。

このうち、どの説明が適切なのか、ここで評価することはできない。評価するためには、さらに異なるジャンルのテキストの翻訳を調査する必要があるだろう。

3. *Beschreibung eines Kampfes* の日本語訳

テキストの前後関係を規定しうるコンテキストが解釈と翻訳に何らかの影響を与えうるとする仮説②をここで検討する。そのためには、埋め込まれた場合の作品、すなわち、*Beschreibung eines Kampfes* (Fassung A) の一部に認められる *Die Bäume* の原形となった部分の日本語訳を比較してみる。⁴⁾

Wir sind nämlich so wie Baumstämme im Schnee. Sie liegen doch scheinbar nur glatt auf und man sollte sie mit kleinem Anstoß weg-schieben können. Aber nein, das kann man nicht, denn sie sind fest mit dem Boden verbunden. Aber sieh, sogar das ist bloß scheinbar.

3.1. 異同の確認

1.1. で提示した *Die Bäume* と比較し異同を確認してみる。歴史的には *Beschreibung eines Kampfes* が先に書かれているので、そこから *Die*

Bäume として取り出される際に変更された点を指摘しておく。

第1文では, „nämlich“ のかわりに, 理由明示という点で同様の機能を果たす „Denn“ が文頭におかれ, „so wie“ が „wie“ だけになっている。第2文では, 語順が異なる他, „doch“, „nur“ という日常的な会話で頻繁に使用される表現が削除されている。第3文では, 前文と同様に „aber“ が削られている。第4文では, „bloß“ が „nur“ に置き換えられている。

基本的な文章構造には変化がなく, 語彙・語順に若干の変更が加えられているに過ぎない。しかし, この語彙の変更により, 会話文からより抽象度の高いテキストに変換されている, つまり, 場面依存度が減少していることがわかる。⁷⁾

3.2. 日本語訳例

訳例は3点しか入手できなかった。本節に挙げておく。記号の使用法については, 本補論末尾の[資料編]を参照のこと。

3.2.1. [A-TYPE : 翻訳] : 2例

[A-I] 《?》

「つまり, 私たちは, 雪のなかの木の幹みたいなものなんですよ。ちよつと見ると, まつたく雪の上に載つかつてるだけのようですから, ほんの一押しで押しのけられそうですがね。だが, そいつが駄目なんです。そんなことができるもんですか。なぜつて, 木は大地へしつかり結びついてんですからね。御覧なさい, 見たところ, なんでもないようですがね。」

(中井正文訳: マックス・ブロート編集『カフカ全集』第3巻, 新潮社, 1971 (1953), S.294.)

[A-II] 《立木 (←「立っている」／「根を張っている」)》

くつまりですね, ぼくたちは, 雪のなかに立っている木の幹のようなものなんですよ。見たところ, 雪の上にただちょこんとのっかっているだけのようで, かるくひと突きしただけで動かせそうです。ところが, ど

っこい、そうはいきません。しっかり地面に根を張っているんですから。
ところがですよ、それすらも、じつは見かけだけにすぎないんです>
(前田敬作訳：『決定版カフカ全集2』, 新潮社, 1981, S.47.)

3.2.2. [C-TYPE：専門文献]：1例

[C]《?→?》

《私達はつまり雪の中の木の幹のようなものです。それは外見上は滑らかに載っかっていて、ちょっと突いただけで、ずらして除けられそうだし。しかし、いや、そんなことは出来やしない。なぜって、それはしっかりと大地と結び付いているのだから。しかし、見るがいい、それさえも単に外見上に過ぎないのだ。》

(小谷哲夫訳：ペーター・バイケン：「解釈学上のことー解釈可能性とパロドックス的循環」。In：『舟』第3号, 1982, S.68.)

3.3. *Die Bäume* との比較ー仮説②の評価ー

Beschreibung eines Kampfes の当該部分は、登場人物2人の行なっている会話の一部である。つまり、一方の人物が話したことが、直接話法で提示されている。そのため、[C]の最後の4文を除いて、基本的に「です・ます」文体で表現されているほか、つぎのような表現も用いられていることに気づく：「～なんですよ」「～ですがね」「～てんですからね」「ところが、どっこい」など。したがって、対話というコンテキストが考慮され、独立した作品の *Die Bäume* に比べて、会話文らしく具体的な場面として生き生きと訳出されていることがわかる。コンテキストが与える影響が反映した訳になっていることが確認できた。したがって、仮説②は確認されたと言ってよからう。

4. 解釈・翻訳・翻訳文体論

翻訳テキストの機能は、それが属するテキストタイプによって異なりうる。すると、訳文の評価は、それぞれのタイプごとに違ってくる。

[B-TYPE]のテキストには解説・議論というメタテキストが付随するので、

そのテキスト内での訳文の比重は高くない。したがって、必ずしも日本語訳文だけで独立し、それだけで十分に理解可能である必要はない。ところが、[A-TYPE]は、メタテキストが付随していないので、独立性がきわめて高い。したがって、「立木」か「倒木」のいずれか、場合によっては「あいまい（両義的）」も含めて、明確な解釈を提示し、それだけで十分に理解可能である必要があろう。

[C-TYPE]に属する日本語訳についてだが、これは果して必要なのであろうか。この問題に関しては、2つの見解がありうる。1つは、基本的に同業者を対象としているので訳出する必要がないという立場である。他の1つは、とくに紀要などの場合は、専攻が異なる者の目にもふれる可能性があるので、日本文は必要という立場である。もし後者の立場にたち、日本語訳を紀要などの専門文献に載せる必要があるとすれば、どのような方針で訳出するのかが問題になる。自己の解釈を訳文から読み取れる程度に強調して訳出するのか、あるいは、便宜的な、いわゆる逐語訳にするのか。こういった問題については、ここでは十分な答えを引き出すことはできない。

*

翻訳には、歴史的な影響関係が見てとれることがある。つまり、先行解釈や先行訳例による影響やいわゆる師弟関係による影響である。たとえば、„glatt“ や „aber sieh“ の訳語の不適切さ、あるいは類似の訳語の頻発は、先行訳例による制約といった観点を引き合いにださないと説明がつかないだろう。また、[資料編] の[C-3]と[C-4]とが同解釈であることの説明には、「師弟関係」もしくは „Schule“ に基づく影響といった視点が必要になろう。このように、訳文を比較する研究には、通時的な側面も関わってくる。

5. 結 語

先行する小論（西嶋 1989；1990）を書くにあたり、*Die Bäume* に関して、可能な限り多くの内外の文献に目をとおした。その過程で収集された訳文が、ここで分析対象となったものである。この訳文を何とか整理しようと考えたのが、本補論の出発点であった。しかし、翻訳という問題は、あまりに広く、多岐にわたるので、一般的な形で議論することが困難な領域である。カフカ

の作品 *Die Bäume* というテキストの訳文の分析を通じて、1つの可能な翻訳比較研究の方向が示唆でき、日本のドイツ文学研究の一部においてまかりとおっている訳文の不自然を指摘できたとすれば、本補論の目的はひとまず達成できたと考えてよからう。

注

- 1) Franz Kafka: *Sämtliche Erzählungen*. Hrsg. von Paul Raabe, Frankfurt/M.: Fischer Taschenbuch Verlag, 1975 ('1970), S.19. なお、後でもふれることになるが、*Die Bäume* は *Beschreibung eines Kampfes* の一部から採取されたものである。この部分の引用も、上掲書に基づく。
- 2) 本補論では、解釈については議論することはしない。さまざまな解釈の検討については、西嶋(1989;1990)を参照のこと。ところで、英語訳とフランス語訳の場合はどうであろうか。ここで調べておくことにする。

英語訳 *The Trees*

For we are like tree trunks in the snow. In appearance they lie sleekly and a little push should be enough to set them rolling. No, it can't be done, for they are firmly wedded to the ground. But see, even that is only appearance.

(Translated by Willa and Edwin Muir: Nahum N.Glatzer (ed.): *The Collected Short Stories of Franz Kafka*. Harmondsworth: Penguin Books, 1988 ('1983), S.382. (=Franz Kafka: *The Penal Colony. Stories and short pieces*. New York: Schocken Books, 1976, S.39-40. Translated by Willa and Edwin Muir.)

英訳 *The Trees* では、“lie”, “to set them rolling” という表現の“rolling”から明らかなように、「倒木」の立場をとり、それを明確に表現していることがわかる。

では、*Beschreibung eines Kampfes* の英語訳 *Description of Struggle* の一部の該当箇所はどうであろうか。

For we are like tree trunks in the snow. They lie there apparently flat on the ground and it looks as though one could push them away with a slight kick. But no, one can't, for they are firmly stuck to the ground. So you see even this is only apparent.

(Translated by Tania and James Stern: *Description of a Struggle*. In: Nahum M. Glatzer (ed.): *The Collected Short Stories of Franz Kafka*. Harmondsworth: Penguin Books, 1988 ('1983), S.45. (=Franz Kafka: *Description of a Struggle*. New York: Schocken Books, 1958, S.83-84.)

“lie”という表現から推測する限り、「倒木」の解釈をとっているようである。

つぎに、フランス語訳を見てみよう。残念ながら *Die Bäume* の翻訳が入手できなかったので、手許にある *Beschreibung eines Kampfes* (Fassung A) の仏訳 *Description d'un combat* の一部と比較してみる。

«Nous sommes pareils, en effet, à des troncs d'arbres dans la neige. On dirait qu'ils sont simplement posés, d'une chiquenaude on devrait pouvoir les pousser. Non, ce n'est pas possible, car ils sont solidement attachés au sol. Mais regarde bien : même cela n'est qu'une apparence.»

(Kafka: Œuvres complètes II. Recits et fragments narratifs. Tra. par Claude David, Marthe Robert et Alexandre Vialatte, Bibliothèque de la Pleiade, Paris, Gallimard, 1980, S.40.)

“...qu'ils sont simplement posés”という表現から、どちらともとれることがわかる。辞書によれば、“posés” < “poser” = „(hin)setzen, (hin)legen, (hin)stellen” といったように、必ずしも一定の方向性と関係のない動詞としてに説明されているからである (vgl. Sachs-Villatte Französisch-Deutsch. Berlin-Schöneberg: Langenscheidt, 1963, S.709)。

3) その理由は、単純である。述語 (2) の動詞 „aufliegen“ は、辞書定義では、通常、横方向のベクトルと関わる。そのため、それと結びつく名詞句は、横方向のベクトルをもつものと想定してしまいがちである。それが、②の解釈を成立させない理由である (vgl. 西嶋 1990)。

4) 上掲書 (P. Raabe 編) S.227を参照のこと。

なお、これには、A 稿と B 稿とがある。Franz Kafka: *Beschreibung eines Kampfes. Die zwei Fassungen*. Parallelausgabe nach den Handschriften. Herausgegeben und mit einem Nachwort versehen von Max Brod. Textedition von Ludwig Dietz. Frankfurt/M: S. Fischer Verlag, 1969)

2つの草稿の内容はつぎのとおり：

[FASSUNG A]:

„Wir sind nämlich so wie Baumstämme im Schnee. Sie liegen doch scheinbar nur glatt auf und man sollte sie mit kleinem Anstoß wegschieben können. Aber nein, das kann man nicht, denn sie sind fest mit dem Boden verbunden. Aber sieh, sogar das ist bloß scheinbar.“ (S.122)

[FASSUNG B]:

„Weisst Du denn schon, dass wir so sind, wie Baumstämme im Schnee? Die liegen doch scheinbar nur glatt auf und man sollte sie mit kleinem Anstoss wegschieben können. Aber nein, das kann man nicht, denn sie sind fest mit dem Boden verbunden. Schon gut, aber selbst das ist bloss scheinbar.“ (S.123)

- 5) „aufliegen“ の垂直方向の意味の可能性については、西嶋（1990）を参照のこと。
- 6) 西嶋（1989）では、氷結という解釈が提出されている。
- 7) 場面依存度については、西嶋（1990）を参照。

参考文献

- 西嶋義憲（1989）：「カフカの *Die Bäume* の構造分析の試み —テキスト言語学の視点から—」. In：『広島ドイツ文学』第4号，1989，S.29-48.
- （1990）：「カフカのテキスト *Die Bäume* を理解するために —テキストの多層性について—」. In：『かいろす』第28号，1990，S.31-44.
- Sandig, Barbara（1978）：*Stilistik*. Berlin/New York：de Gruyter, 1978.

[資料編]

ここでは、日本語訳を翻訳タイプ別・発表年代順に列挙していくわけだが、まず、記号使用法についての取り決めをしておこう。

《 》内は、翻訳された日本語文章だけから判断できる範囲内の „Baumstämme im Schnee“ の状態を示している。たとえば「立木」と「倒木」は、それぞれ、立っている状態と倒れた状態を表わす。「?」は、訳文上から、どの立場の解釈にたっているのが判断できないことを表わす。

「(←)」の「←」後に示されるのは、判断基準となった明示的な日本語訳語である。[C-TYPE]の研究論文などについては、訳文から判断できない場合、論文中でどのような解釈に基づいて議論がなされているのかを、「→」の後に示しておいた。「→」の後の「?」は、論文中でも „Baumstämme“ の状態が直接議論されていず、解釈の立場が不明であることを表わす。

[A-TYPE: 翻訳] : 5 例

[A-1] 樹木《立木 (←「立つ」／「根を張っている)》

だつて私たちは雪中に立つ樹の幹なのだ。見たところそれはすべすべと雪の上に載っている。ちよつと押せば簡単に押しのけられそうに見える。ところが、そうは行かない。固く大地に根を張っているのだから。だが見よ、それさえも見かけに過ぎないのだ。(原文は旧字体)

(高安國世訳：マックス・ブロート編集『カフカ全集』第3巻，新潮社，1953，S.35.)

[A-2] 樹《?》

つまりわたしたちは、雪に埋もれた樹々の幹に似ている。その幹は、たいらに雪の上にのせてあるように見え、かるく突いてすべらせることができそうである。ところが、幹は、しっかり大地にむすびついているのだから、それはできない。しかしまた、このことですら、じつは見かけ倒しにすぎないのである。

(本野享一訳：フランツ・カフカ『ある流刑地の話』，角川書店(角川文庫 2251)，1992(1963)，S.48.)

[A-3] 木々《?》

なぜならば私たちは雪のなかの木の幹のようなのだから。それは滑らかに雪の上に載っているように見える、ほんの一突きで押しのけることもできるだろう。いや、そうはいかない、木の幹は大地とかたく結びついているのだから。しかし、見たまえ、それすらもそう見えるというにすぎない。

(丸子修平訳：『決定版カフカ全集1』，新潮社，1980，S.29-30.)

[A-4] 木々《立木 (←「立つ)》

だってわたしたちは雪中に立つ木々の幹のようなもんだから。一見それらの幹は、すりとのっかっているように見える。だからちょっと突いてやれば、押しのけられそうに思える。だがだめだ、そうはいかない。だって幹は、しっかり大地に結びついているんだから。ところがどうだ、それさえ見かけにすぎない。

(吉田仙太郎訳：『カフカ 観察』。高科書店、1992、S.82-3.)

[A-5] 樹木《立木 (←「根を生やしている」)》

つまり、われわれは雪のなかの樹木のようなのだ。のっかっているだけで、ちょいと突けば押しのけられる。いや、そうはいかない。大地にしっかり根を生やしている。しかし、どうだ、それもそう見えるだけ。

(池内紀訳：『変身ほか』カフカ小説全集4、白水社、2001、S.30-31.)

*

[B-TYPE：非専門文献]：4例

[B-0] 樹木《立木 (←「立つ」)》

だつて私たちは雪中に立つ樹なのだ。見たところそれはすべすべと雪の上に載っている。ちょつと押せば簡単におしつけ（ママ）られそうに見える。ところが、そうは行かない。固く大地に根を張っているのだから。だが見よ、それさえも見かけに過ぎないのだ。（原文は、旧字体。なお、明らかに[A-1]を下敷にしていると思われるので、数に含めないことにする）

(小島信夫：「消滅の文学 ―カフカにおける抽象性について」。In：『文藝』2月号、1957、S.83。（＝辻理編：『カフカの世界』、荒地出版社、1971、S.122）

[B-1] 「樹木」《倒木 (←「切り倒された」／横たわっていて)》

人間は雪の中の「切り倒された」樹木に似ている。見かけは平らかに横たわっていて、ちょつと押せば押しのけられそうだ。いや、それはだめだ、木は地面としっかり結びついている。しかしごらん、それさえただ見かけにすぎない。

(城山良彦：「ドイツにおけるカフカ研究の現在」。In：『ユリイカ詩と批評』vol.2、青土社、1979、S.79.)

[B-2] 木々《?→「立木」でかつ「倒木」というパラドクスと主張》

なぜならばくらは雪の中の木の幹（Baumstämme）のようなものに似ている。それは一見すると滑らかに雪の上ののっているようだ。ちょつと一突きすればずらしてのけることができそうだ。ところがそうはいかない。木の幹はかたく大地とむすびついているのだから。しかし見たまえ、そのことですら、そうみえるというにすぎないのだ。

(三原弟平訳。池田／好村／小岸／野村／三原：『カフカの解説』、駸々堂、1982、S.212.)

[B-3] 表題なし《立木 (←「立っている」／「根は大地に深くのびている」)》

そう、ぼくたちは雪のなかの樹の幹なのだ。みたところすらりと立っていて、ほんのひと突きで押しのけられそう。いやそうはいくまい。なぜって。根は大地に深くのびているのだから。でも見たまえ、それだってただの見せかけのことなんだ。

(脇阪豊：「続・盛岡から」. In：『匙』No.6, 1982, S.39-40.)

[B-4] 樹々《?→「立木」でかつ「倒木」というパラドクスと主張》(=[B-2])

だって、ぼくらは雪のなかの木の幹のようだから。それは滑(すべ)らかに雪のうえにのっているようだ。ちょっと一突きすれば、ずらしてのけることができそう。ところがそうはいかない。木の幹はたたく大地と結びついているのだから。しかし、見たまえ、そのことすら、そう見えるというにすぎない。

(三原弟平：「スライドするパラドクス ―カフカにおけるイメージの変遷と現実―」.

In：『講座・20世紀の芸術5 言語の冒険』, 岩波書店, 1988, S.96-97.)

*

[C-TYPE：専門文献]：13例

[C-1] 表題なし《立木 (←「たっている」)》

だって我々は雪の中になっている樹木の様なものなのだ。見たところすなりとたてかけられてある様で、ちょっと一押しすれば、おしのけることも出来そう。否そんなことは出来ない。樹木はしっかりと地面に結びつけられているのだから。しかし見よ、それさえも見せかけにすぎないのだ。

(植松健郎：「カフカの短編への一考察」. In：『大阪工業大学紀要人文篇』第4巻第1号, 1960, S.41.)

[C-2] 樹木《?→「立木」と主張》

というのも我々は雪の中の樹幹のようなものだ。みたところそれは滑らかにのっかっていて、軽く一突きしてやればずらせそう。どっこい、そういうわけにはいかない、というのもそれは大地としっかりと結びついているのだから。しかしごらん、それさえみせかけにすぎぬ。

(林捷：「カフカ：『観察』『ある闘いの記録』論 ―あるいは陸の船酔い―」. In：『福井大学教育学部紀要第I部人文科学外国語・外国文学編』第24号, 1974, S.125.)

[C-3] 樹木《倒木 (←「横たわっている」)》

というのも、私たちは、雪の中の樹の幹のようなものだ。／見たところそれらはすべすべと雪の上に横たわっていて、ちょっと押せば簡単に押しのけられそうに見える。／ところがそうはいかない、それらは固く大地に結びついているのだから。／だが見よ、それさえも見かけたに(ママ) すぎないのだ。／

(井上正篤：「フランツ・カフカの小品集『観察』について」. In：『東京工業大学人文論叢』No.2, 1976, S.108.)

[C-4] 樹木《倒木 (←「横たわっていて」／「固く大地にくっついている」)》

だってぼくらは雪のなかの樹の幹のようなものだ。見かけではすべすべと雪の上に横たわっていて、ちょっと押せば押しのけられそう。いや、そうはいかない、固く大地にくっついている。しかし見よ、それさえ見かけにすぎないのだ。

(城山良彦：『『ある戦いの記録』について (二)』. In：『井上正蔵教授記念論文集』(=『東京都立大学人文学報』116号), 1976, S.110.)

[C-5] 樹《?→?》

つまりぼくたちは雪に埋もれた樹々の幹に似ている。その幹はたいらに雪面にのせてあるように見え、かるくつついてもすべらせることが出来そうである。ところが、幹はしっかり大地に結びついているのだから、それは出来ない。しかしまた、このことですらじつは見せかけにすぎないのである。

(本野享一：「カフカの『不安定な』聞いについて」. In：『ヨーロッパ文学研究』(甲南女子大学)第2号, 1978, S.90.ただし、初出雑誌 *Hyperion* からの翻訳)

[C-6] 樹木《立木 (←「立つ」／「根を張っている」)》

というのも私たちは雪の中に立つ樹の幹のようなものなのだ。それらは一見すべすべと雪の上に載っており、ちょっと押せば簡単に動かそう。しかしそうはいかない。それはしっかりと大地に根を張っているのだから。だが見よ、それさえも見せかけにすぎないのだ。

(梅津真：「Steinmetz の Suspensive Interpretation – der paradoxe Zirkel をめぐって」。In：『独語独文学科研究年報』(北海道大学文学部)第9号, 1982, S.61.)

[C-7] 樹木《?→?》

なぜならば私達は雪の中の木の幹のようなものだから。外見上はそれは滑らかに載っかっていて、ちょっと突けば、ずらして除けられそう。そんなことは出来やしない。なぜって、それはしっかりと大地と結びついているのだから。しかし、見るがいい、それさえもただの外見上に過ぎないのだ。

(小谷哲夫訳：ペーター・バイケン：「解釈学上のこと ― 解釈可能性とパラドックス的循環」。In：『舟』第3号, 1982, S.69.)

[C-8] 樹木《?→「立木」と主張》

だってぼくたちは雪のなかの木の幹みたいだからさ。みたところそれは雪のうえにないめらかに載っている。ほんの一突きで押しのけられそう。いやそんなことはできない。

だって大地としっかり結ばれているから。だがごらんよ、それだってそうみえるだけなのさ。

(本橋右京:「カフカ試論Ⅰ —『樹木』を形成する視点—」. In:『独文論集』(都立大学大学院)第2号, 1983, S.83.)

〔C-9〕 木々《立木 (←「立つ」／「根を張っている」)》

なぜって私たちは雪の中に立つ樹の幹のようなものだ。見たところそれはなめらかに雪の上に載っている, ちょっと一突きで簡単に押しのけられそうに見える。ところがどっこいそうは間屋がおろさない。なぜって固く大地に根を張っているのだから。だが見よ, それさえも単に見かけに過ぎないのだ。

(柴田庄一:「フランツ・カフカの文学世界(1) —〈書くこと〉の意味するもの—」. In:日本独文学会東海支部『ドイツ文学研究』第18号, 1986, S.61.)

〔C-10〕 木々《?→?》

というのも, 私たちは雪の中の木々のようなものなのだ。見たところ, それらは平らに雪の上に乗っていて, ちょっと押せば押しのけることができるだろう。いや, そんなことはできない。というのも, それらは地面とかたく結びついているからだ。しかし見よ, それさえも見せかけにすぎないのだ。

(古川昌文:「ある敗北の記録 —カフカ作品の一つの深層構造—」. 広島大学大学院修士論文, 1989, S.13.)

〔C-11〕 木々《?→?》

というのも, 僕たちは雪の中の木の幹のようなものなのだから。それは滑らかにのっているように見える, ちょっと突いてやれば, ずらしてやることもできるだろう。いや, それはできない, というのも, 木の幹は大地としっかり結びついているのだから。しかし見たまえ, それすら, そう見えるというにすぎない。

(斎藤昌人:「閉ざされる世界」. In:京都大学大学院独文研究室『研究報告』5号, 1991, S.106.)

〔C-12〕 木々《?→?》

なぜならば私たちは雪の中の木の幹のようなものなのだから。それは見かけの上では滑らかに雪の上に載っており, ほんの一突で押しのけることもできそうだ。いや, そうはいかない, 木の幹は大地とかがたく結びついているのだから。しかし, 見たまえ, それすらも見かけの上にすぎない。

(山田積:「カフカにおけるパースペクティヴの転換と〈通路〉のトポス」. In:『熊本大学教養部紀要 外国語・外国文学編』第26号, 1991, S.108.)

〔C-13〕 樹々《? (→立ち木 (「木の実像」「木の実態」))》

つまり僕たちは雪の中の木の幹みたいだ。見たところ、それはそっとのっかっていて、ほんの一突きで動かせそうだ。でも、違うんだ。そんなことはできやしない。だってそれは地面としっかり結びついているんだから。でも、ほら、それだって見かけだけなんだ。

(尾張充典：「文学のトボスと性のトボス — 『ある戦いの記述』の「戦い」を巡って」, mimeo.)